

^ 13
3591
2



門 13
號 3591
卷 2



日本國 開闢由來記

凡例

此書ハ我邦の大古國を開きまひりし由來を世に弘く知らん
ため我邦の國史古典の中より專俗に通じ易きやうを旨とし
抽出せりゆのたゞその名を假名日本紀といふを以てし
今の世に神史小説の專善を勸惡を懲ことを説ふも加ふ夾画といふ
ものを以てあれ依り先本文の意義を應兼しむるハ婦女總髻の
ことを讀み領解し易く情ふ適問を遣の便宜として顔戲場と看るに
類似するもの多きを人々に愛翫せしむ今此書を其體裁を彼れ倣ふ
その様を換はせども此正史傳記等の實事をそのまゝに記するもの

早稲田 大学 図書館
昭和 35.10.12 購
藏 書



なるを。彼稗史小説の奇を説怪を譚く。人の意を動情を迎ふ如き。妄誕をのふと能く。讀者の厭倦を生じ易き。素より言まへもあつた。己が身の生くる此日本國の世界萬國に勝る靈威ある國土なるをも知れ。本報の心をきこむ。神明の眞慮に背。天地の條理に反ぬを。不祥なりとより大なるはやく。然のそと。此邦人の殊方と異なる。天稟自然性質に所謂日本魂あることを知む。遂に怯心のとなりゆく者の世は多有んことを慨す。古事記日本紀をよめ。其他の諸書より參採し。些も私の修飾を加。山野の鄙夫。治繅の老姫まで。通曉易きを旨りて。此書を著するの心を。その體裁の稗史小説に類似たるを以て。同觀ことたりとす。

一 道の天地自然の性。率ふをばみ。其教を設る。各國その風土。小由る差別あり。天竺などの風俗あり。頑愚なる國人を教化むと。さるりの。瞿曇の如く。地獄極樂因果報應等の種々の方便を設く。あまは導く。これその風土に相應たる教誠なり。漢土の如き。民の心を本として教を立るところの國土を。假令天下の主たりとも。暴逆ありて。民の心を失ふと。これこれを代ふれを放く。其位は代を道とを。なり。故に孟子も。民為貴。社稷次之。君為輕といひ。土神穀神乃社壇なりとも。早魃洪水などの變類ありて。あまを禦捍。こや。なぐのを。其社壇を毀く。あれを更置。況てそを。小次と。その國君の民を治ると。能く。暴逆ありて。民の心を違ふと。多々れを。

明君出で其位ふ代も皆そは風土小應トく聖人の立たる。漢土の道なり。それらとひまご格別みして。我日本國の皇統を天津日嗣といふこと。天上の高間が原に在すは所の天照大御神の御子孫みして天つ日の御跡を嗣せさすといふ稱をこの古事記日本紀などふまの是をひひ續日本紀の歌ふも。苗刺天照國の日は宮の聖の御子とひひ。我邦の昔の世人の普く知たることなり。まご萬葉集の長歌ふ。天地の初の時に久堅の天の河原ふ八百萬千萬神の神集々いひして。神分々一時天照日女の命と天雲の八重搔別く。神下座奉し。なご詠るも。天照大御神の高天原を知り。そは御孫瓊々藝の命。あの地界一降臨さすひたることを

いなるふ。君を君として立たる國土あるが故。攝家清家の家々も皆天上より倍従来く事奉たる。神人の裔孫み。開闢の太古より君臣の名分定ま。動揺あたら。天皇の皇統も一系みして擾亂をまぬ。然のまなり。其皇子み源平等の姓を賜ま。一び臣下の列みたりたまひ。かたはら皇子親王といふも。再姓を除く皇位を継さすひたる。あやなれ。靈異の尊位みま。さす。故に武烈天皇の如き。御所行とて。残忍り。ま。して。孕婦の腹を割く。其胎を觀人の頭髮を抜く。樹小登ら。め。之を射墜た。ふ。などの大惡逆も。崩御をま。あ。す。臣下に誰一人これ。を。裁奉ん。と。か。り。あ。ら。の。め。な。く。天皇と仰奉たる。君臣の名分一定て。あ。妄に動揺さ。た。風土の然ら。む。ふ。由。の。な。り。故に天下國家を治る補翼

とる聖教を採。その文字曲藉を今日の必用とする。漢土とも君臣の義を
いふにふい相違あるを況く。西戎墨夷などの例を以て論をきこみあはせ
るなり。此篇ハ其降臨の確實なるを皇統の隆と天壤ともにも窮なき
神勅の正證あるを普く世に告諭んが爲に抄述するものなり。進雄命
のよの地界へ降臨すまひ。その七世の孫大國主命の。此國土を瓊々藝命に
讓奉るをよとす。神劍八咫鏡の國家を衛護たまふ。靈驗の炳然ある
ことを記す。胡元の軍艦を西海の浪に覆没し。十萬の軍兵を塵ふせし
事に筆を閣く。天地の剖判より。磐戸隱などの幽玄して倉卒小領會し
がくは事ともいふべき。皆て載するなり。

我日本國の地乃殊に異域に優たる所以に。北極地を出るよと三十度より

四十度の間。正帯の處に在る。寒暑其中を得。地ハ南北に陟。東西より
跨る。四方に海を環し。土地膏腴。五穀豐饒あり。草木繁茂。果實よく
熟成。金銀銅鐵鉛錫の類。すべて國土に生ず。一切缺乏なる物あることあり。
殊に世界最第一なる粳米を。六十六州の間。産する地なく。まもも刀劍乃
銳利なるよと。全世界中よ比類なく。近海よの炭石多し。大船を寄
るよ便宜からる。且人民衆多し。他國よ數倍し。天賦の良質あるを以て
清潔を好。神を崇む。義を重むるよと。此土よ生を受たる人の自然
より出たるよ。淳樸質實ありて。勇氣あるよ。大古にこれ人乃道と
いふこと。忠義孝貞などのよ。名目もなされ。其行事の道よ。違ふもの
少く。大伴氏の遠祖天押日命の誓に。海行ハ水付屍となり。山由りて

草生屍とかなる者なくとも厭す。大君のうみ死す顧
らせしとのひ。筑紫の防人として東より賦役ふさぎまてゆく土兵が額より
箭のわたるとも背ふも箭の負ふ進むとありとも退くとせぬとのひ
おとく。君臣の義父子の親もかのづう具たりしが人漸ふ多くなるに従て
教法なくして治ぐれば由る小應神天皇の御世に漢土聖人の書の我
邦の風土に相應をなさしことを知りしめてあまを三韓より傳へし
人々を教へ天下國家を治る輔翼と爲たしより。儒道に此邦に弘まると
其道今よ至く盛るごとくも昇平年久く士民游墜ふ馴風俗淳華に
靡博覽詩文と學問の専務とありかやふなりゆゆ。これを以て禮義
廉耻の四維と張るる志を發起りゆとも顧慮を大に儒道の本意を

失はる如くわれども。此土に生を受たる人々の身も具有たる天稟の良性を
決して止さるが由る今もあま文武の大道をりつるまを激厲とせ
ふに必發現出く故に復んとす譬に三冬の嚴寒よ水氷土涸れぬ樹木
の葉盡く落く。枯槁たるが如く草莖を朽とく存るのみなきが如く
なるも。其枝幹をく根葉花實となり莖葉とあるべき質盡く
含有たるが如くなること。野人鄙夫の目丁ぞ不知ざる輩郷丁傭夫の
徒ふも。ぞりく俠腸義氣がありて事ふ臨て敢て死を顧ざる者のあるは
知らるたり。故に今この日本魂の義氣ぞみ現出るとは我一を以て
興方の百千人に抵當不足なく。國土の肥饒なるよとの地中海亞墨
利加などの地ふも。十倍に倍をなく。況て北邊鄂羅斯等の不毛

地多き國土ふくむその百千倍を以て我疆界も充さるも尚劣ぬべし譬を
石瓦も大なりとも。珠玉の小なるに比しては如く。土地の廣狹を以て較
匹なきりのみあはざるあり。

一 言語の國土は疆界を辨別なき自然のものなり。唐土萬國の總て用語
を先ありて、辭語を後ふと。天竺和蘭の書等皆然り。獨我邦の辭語を
先ありて用語を後ふと。書を讀むと、書を讀み、辭語を讀み、用なり。讀書と
りをも、讀むと、用語を先ありて、書、辭語を後ふと。辭語の本ありて、君主
のごとく、用語を末ありて、臣民の如し。我日本國の如し。此言語を以て事を
辨るゝと、我皇統の一系に、天地と與ふ窮なき實祿も坐して太古
君と君として立ち。坤輿中も冠し、尊き國體なるものと。此言語あり

分る。自然のものなり。且我邦の昔より諸の事物を萬國も採り用ふ
ものと、猶貴人高位の人の身自一切の事物を營作となく、惟臣下庶
民も命を造り、之を採り用ふが如く。且視聽言動等の機會と
なると、耳目口鼻等の頭上も在る、下胸腹四肢の根本となるが如く。我邦
國幹の大も萬國も冠する所以也。且此等の例を以て、準知らるるを
あとなく、自然と明の宋景濂が日東の曲も侏儻逆讀とのひの例の
已に國と中華中國と稱し、他を卑んぶる心、これを逆するといふも。
強み答むべきことあり、益と。物部茂卿太宰純なると。此邦の人として。
安んず漢土も左祖して、ことを目く、回環顛倒の讀むの、大なる僻事あり。
却て我邦の言語を正して、異方の言語を顛倒せる所以を、知る、偏心

より起るとあり。論も足ぬあとどもなり。

太古の年数へ弘仁曆運記（つとむ）に載るところも。皆荒唐説（あやふし）とて。後人
妄（あやふし）採（と）る。まこと日本紀神武天皇紀（つとむ）に屢（しばしば）入（い）る。なりと或人のいふ
ハ然（しか）る。まことなる。暫（しばしば）其説（そのいふ）に従（したが）て。二百七十九萬の六字と省（すく）る。ありと
その年数。氣運の旺（さか）と變（か）革（くわ）ある。至（いた）る。卒（つひ）爾（つひ）解（い）説（は）つた。と多く。
此書（このしよ）の唯（ただ）こを。婦女（に）總（しよ）髻（こ）の看（み）得（え）らる。べきや。に。と。記（し）た。りの。あり。第
十回（じゆ）不（ふ）畧（りやく）その一端（ひと）をい。る。の。と。あり。審（しん）悉（しつ）あり。と。天（あま）日（ひ）嗣（し）辨（べん）ふ。記（し）載（さい）と。あり。
此（こ）ふ。と。あり。と。省（すく）る。なり。

舍人助岩垣松苗（しよ）國史畧（こくしりやく）に。松永貞徳（しょうえい）載（し）恩（ん）記（き）の説（い）と載（し）て。曰（い）。豊臣
太閤（とうこう）嘗（かつ）て朝服（ちやくふく）を闕下（けつげ）の施藥院（せやくいん）に著（つ）し。と。た。敷（し）。天（あま）顔（がん）を拜（を）と。あり。

感激（かんげき）ト人（ひと）み謂（い）て曰（い）。微賤（ゐいせん）身（み）より起（おこ）て人臣（にんしん）の位（ゐ）を極（き）る。と。天恩（てんおん）實（じつ）ふ深（ふか）し。蓋（け）
吾母（ごぼ）昔（むかし）朝家（ちやけ）式（しき）微（ゐ）た。まの。時（とき）ふ當（あ）て。後宮（こうきう）ふは。え。一（ひと）賤（せん）役（やく）を奉（ほう）。一日（いちにち）不
圖（と）龍躰（りゆうたい）ふ近（ちか）づ。きた。て。ま。り。て。有（あ）身（み）。その。も。出（い）て。尾張（おわり）の人（ひと）ふ嫁（よめ）。吾（ご）を。生（な）た。る。ち。り
と。松苗（しょうぼう）按（お）ふ。豊太閤（とよたうこう）。我（われ）邦（くに）。古（いにしへ）今（いま）無（な）双（さう）の大（だい）豪（ごう）雄（ゆう）。ふ。其（その）行（な）事（じ）の。播（は）落（らく）。さ。り
あ。と。の。日（ひ）月（げつ）の。故（ゆ）然（ぜん）。さ。り。さ。り。如（ごと）く。さ。り。さ。り。不（ふ）獲（と）味（み）。さ。り。さ。り。托（たく）言（ごん）と。い。ひ。く。自（みづか）責（せ）種（しゆ）。と。稱（せう）。が。さ。り。さ。り。
身（み）劣（せつ）心（しん）。い。な。る。と。人（ひと）あり。故（ゆ）ふ。此（こ）戴（たい）恩（ん）記（き）ふ。い。ふ。と。ち。り。を。断（た）て。實（じつ）言（ごん）と。か。り。と。下（した）。世（よ）。又（また）。豊
太閤（とよたうこう）の。嘗（かつ）て。吾（ご）母（ぼ）日輪（にちりん）の。懐（な）み。入（い）と。夢（ゆめ）と。て。吾（ご）を。生（な）た。る。と。の。と。ま。り。と。下（した）。傳（でん）。の。隱（いん）然（ぜん）。
ふ。そ。の。皇（み）統（とう）。ある。と。い。ふ。と。實（じつ）に。それ。の。と。ま。り。と。下（した）。朝（あ）廷（てい）と。憚（は）た。ま。り。と。い。ふ。と。
國（くに）家（け）の。禮（れい）義（ぎ）を。思（おも）ふ。と。ま。り。と。下（した）。施（せ）藥（やく）院（いん）の。一（ひと）語（ご）。偶（ぐ）感（かん）激（げき）喜（き）悅（えつ）の。餘（あ）ふ。出（い）る。
あり。と。其（その）實（じつ）を。泄（し）す。と。ま。り。と。下（した）。抑（お）す。と。大（だい）政（せい）所（じよ）の。日（に）輪（りん）の。夢（ゆめ）。に。托（たく）。て。言（い）ふ。と。ま。り。と。

或い夢よその兆ありしやわのつぎふも豊公の興たまりの數年の間亂を撥正不
及し天子を翼戴諸候を亂合て法を將來に垂て武將萬世の軌則と為さるふ
大智大勇を兼備しるひもこの大殊絶するひを觀し其種あると固し
必然なきとたかり。そと我神國の大外國と異ありて天下に即一人の天下にて
天子の實は天上の人もありしや。王公將相といへども悉皆その種あるなり。故に
古今の英雄の將相の位に至る。天下の權を執し人の微賤の胤あるに曾く
あると形。平相國の如き固より皇胤なり。鎌倉の右大將をひ北條氏
足利將軍織田右府の如きも皆。桓武。清和の皇裔なり。然り豊公
の系は全く戴恩記の如きところ實言に。誣説に非ることを知る。世は豊公の
凡種奴隸の出身ありとするところ然るもさりとありといふ。此説實に其理ある

あるとく思ふが故に今此小擧ぐ世に知しむるものなり。指漏漁者竊ふり
お豊公の此事を妄言するの天皇の大政所堅く誠をまひけるが故にこれを
いふことを得たりしものあり。一説に豊臣大閣の後奈良院の落胤ありて
母は持統中納言保薦卿の尾張に配流せらるる頃同國御器所村の獵
師の女に逢り産せり。由縁を以て宮中奉仕して遂に龍體に近づき奉り
懷孕ありしといひ。然もあるべきことなり。
我邦の太古の文字ありしもの日本紀の改。推古天皇の御宇に異域の典籍の
傍に神代の文字を記す。之を讀みわたりしといふる文字ありしもの明晰なれ
ども三輪の額字。桃尾井磨の印章をみ用ふる外に鹿嶋神社三輪神社彌彦
神社鶴岡八幡宮大和法隆寺其他の神社などの庫中に古昔より傳ふる神

字の書と藏するの事あり。何不分明世に用ふことなれば之を知者も多有らざるべし。
この頃の先達これを比校辛苦して漸く讀得たるものを採りこれを目錄の額縁に
び大極木の圖説の上下に記せざれば我邦の淳樸質直なる太古の易簡の
て煩きことなき世に強し文字を用ふことなると足あらず人も漸く蕃殖
も彌重沓なりしより文字典籍は始やらず一切の物を異域より採
用することふなりし悉皆神の幽簿をまふことにして却て我邦の寰宇の中
み於て萬國に傑出する至貴ことを觀るとなることい前も既も言ふが如く
なまを今の世にても日本魂を確立する私の好惡を去て異域の善ことを採
て用ひ我邦の物とせんは強し漢土と西戎との差別の論べしとにあらばよま
はまはち 先皇の御遺意ありしとく國體に合ふものといふなきなり然るに已

好惡とてろ小辟名聞利慾を覆味されし取捨その宜を得ざるは世の害
となることや淺少にあらず惣てのことに私心利己を去公平の意を用て國家
の為小遠慮することなり。我邦衣服器械の制度甲冑兵器等の形狀の所
謂神代の鉞頭捷の劍などの圖小見せし物にの意を採ともその他ハ明か
らざるに記たる書典もあらず今も在て不知なる事多し予が相識者
吉田無言翁は説ふ日の東より出るともなるも其實ハ地の左へ轉なり草の蔓
も左へ纏絡人屨も左へ穿るハ腸の左へ廻るなり弓射も左へ放ち文字も左へ運
とへをなすあれ天神の御心なきは太古の社を左へせしもまさ自然なるよと
知むなり漢土人のひとり社を右へなりて他を身しめ其とて誇矜て佳事と
思ひてはわが世を保得ざる邦人らに言ふ話とて自己國の真の道を去專

彼不傲んとするは、いとも悔恨こそあざりたる。といはれる。此翁の繪事不殊不巧ありて、我邦の學不深く意を注ぎ、太古の衣服器械などをも、其名も由り、その實を覓檢覈して畫出さるることの採用べきこと、もいへども、不操らるること、も多し。又畫工國芳の創意より出たることも多有り。是婦女童幼の之を看んば、みそけ厭倦を放遣さば、睡眠を催起さるんことを欲す。夾加るとあり、されば盡く太古乃真形なりと思ふこと、うれしき讀者よく此義を領會せよ。

安政三丙辰歳春二月

一夢道人指漏漁者誌

日本國開闢由來記卷一

指漏漁者編

第一 叢雲の神劍世間不出現し、國家の護となる

大少の二神天下を經營て鴻業の基を建

進雄命は天上の高天原より出雲の國に簸の川上より降臨たまひ、其地を領したる者の名を脚摩乳といひ、妻の名を手摩乳といひ、此者れ為よ。越の國に八岐大蛇と字號りのを斬り、其害を除き、まひりて死す。天に葵雲の劍、まこの名に草薙の劍といふを得たまひ。是も神劍なり。吾私のものなりと安んずるのよあはれ。天つ神の御許に獻たまひ。後、脚摩乳の女奇稻田姫を妃とて、俱に住たまはる。

覓みまひて出雲の國くに清地すがといふところところに到いたり其地そのちの風光けいけいを眺望たうぼうと
まひく吾われ此地このちに到いたり心清こころすがくくくなりぬこも吾われ宮居みやゐを建たて住すむ
地このちなるべしと好このちまひく其地そのちに宮慶みやげを營造つくりせしことに此御詞このみことばはより
く其地そのちの名なを清すがとまひく後のちより須賀すがといふなりその宮殿みやどのを
修造あたらせしことに時ふ詠よみまひく御歌みか

彌雲やすみたつ出雲彌重垣いづみはまおめ彌重垣造いづみるそれやへがま成なり
此御歌このみことばも御妃奇稻田姫みけのあそを棲すめたまりんが為ためよおれ八重やへがたの
宮居みやゐを造つくせられたるといふ意いを詠よみをたふとらるる今いまの世よに
も人のれい並ならく詠よみることに三十一文字の歌乃最初さいしょあり句意ことばの
絶妙たつせうなりとらるる神詠かみよみなり此の御歌みかの意いを略りやくし釋しやくば八重

垣かきのや彌やの義ぎふくやぐらへは重疊かさねたる雲くもといふことにておの
雲くもも青雲あそ白雲しろくもの差別さべつあり白雲しろくもは降ふる雨あめとなるところに平常つねは
視みるところの雲くもといひ青雲あそと大虚おほいその中なかに充滿みちみり重疊かさねたる
氣きの仰あがりたる成なり視みる蒼々あざあざたる精微せいゐの氣きにて天地萬
物ものも唯ただこれ氣きを以もつて繋維保持つなぎとめするのにて天上てんじやうよりこの氣きを
以もつて壓覆おさひ人もなふも悉しつ皆みな此氣このきの中なかに住居すまひるおれ氣きを
呼吸こそして生命いのちを保たもつて自己おのれが身みの中なかに此氣このきの中なかにあることを知し
さるること猶魚なまこの水みづの中なかに泳およぐ水みづを知しるごとく近ちかく眼めを
遮さら糸いとど高く仰視あがみる青あそく視みゆるが故ゆゑに白雲しろくもを對むかへてあまを
青雲あそといひま彌重やへ棚雲たなぐもともいふ棚たなは横よこに靄もやるごとくゆくと



卷



進雄命
天津神
獻んと
去りて

粟て。棚のぶくちをたるとり名あり。五百重雲といふも。その重雲
 ありよりとる名あり。天孫降臨の段。稜威道別小道別と天降と
 まるとりも。その棚雲ハ幾重ともなく重雲てりるがゆふ。稜威
 の方を以て別ち。道ありとてり。道をつけりることせりるあり。その
 八雲起といふと發語あり。出雲といふ。出雲といふ。出て立昇る雲といふ
 あといふ。その出雲を兼る。彌重垣といふ。宮居の牆を幾重も
 建營く。嚴密不固守せり。御意あり。出雲といふ。国の名も此
 御歌より起る。その地を出雲といひり。八雲起と詠る
 神。そのもつる。はまらる。嬌を隠せ置んが為。その八重
 垣の造りと。辭を重ての。その奇稲田姫を愛れり。

御意の深長こよを含有く詠せたり。ひるなり。ま。吾彌重垣
 と造んとせり。此宮の為。彌重垣と造ると。唯雲のうを
 の。ひる。中。と釋も。ある。一。

是れ。是れ。足摩乳。汝。我宮の首とあれ。これ。須賀の宮。此事を
 侍せ。奇稲田姫の生。八島七奴美神と
 の。八島七奴美神。大山津見の神。女。名。木花如流姫と娶。御子。布波能母
 遲入。奴須奴神と生。此神。游。美の神。名。日河姫と娶。御子。深淵
 の水。夜禮花の神と生。此神。天之都。度。閉。和泥の神。女。名。と娶。御子。添。美。豆
 奴。神と生。此神。布。怒。豆。奴。神の女。名。布。帝。耳。の神と娶。御子。天。之
 冬。衣。の神と生。此神。刺。國。若。姫と娶。大。國。主。の神と

生たす此大國主の神（大國主の神）命は世の孫より大國主の神（大國主の神）の五の
神（大國主の神）天虎（天虎）天達（天達）の神（天虎天達の神）と云ふ。要するに神（天虎天達の神）と云ふ。宇都志國主の
神（大國主の神）と云ふ。其の大國主の神（大國主の神）。兄弟八十神（兄弟八十神）あり。此兄弟（兄弟八十神）との父（兄弟八十神の父）と同一
なる兄弟（兄弟八十神）あり。其遠祖（遠祖）より此親屬（親屬）あり。今より從兄弟（從兄弟）再從兄弟（再從兄弟）。二從
兄弟（從兄弟）あり。指（指）てのり（のり）のり（のり）のり（のり）。然るも皆大國主の神（大國主の神）と云ふ。從
從奉り。唯この大國主の神（大國主の神）。此豊葦原の瑞穗の國（豊葦原の瑞穗の國）。後大倭の國
とも大日本國ともいふ地（大日本國ともいふ地）を領（領）したまひ。素盞鳴命（素盞鳴命）の女（素盞鳴命の女）。須世理毘賣（須世理毘賣）を嫡
妻（嫡妻）とす。出雲の國（出雲の國）。出雲郡宇迦志郷（出雲郡宇迦志郷）の西（西）なる。後小鯨淵山（小鯨淵山）といふ
地の山本（山本）小宮居（小宮居）したまひ。此大國主の神（大國主の神）。胸形（胸形）の奥宮（奥宮）に住（住）たまひ。一
神（大國主の神）の女（大國主の神の女）。多紀理毘賣（多紀理毘賣）と娶（娶）。阿遲鉏高彥根（阿遲鉏高彥根）の神（阿遲鉏高彥根の神）。妹高毘賣（高毘賣）命（高毘賣命）又の名（高毘賣命の別名）の

下照姫（下照姫）を生（生）たまふ。此阿遲鉏高彥根（阿遲鉏高彥根）の神（阿遲鉏高彥根の神）。今加茂（加茂）の大神（大神）と云ふ。此の神（阿遲鉏高彥根の神）
神屋楯比賣（神屋楯比賣）命（神屋楯比賣命）と娶（娶）。御子事代主（御子事代主）の神（御子事代主の神）を生（生）たまひ。まゝ八島（八島）牟遲（牟遲）の神（八島牟遲の神）
の女鳥耳（女鳥耳）の神（女鳥耳の神）と娶（娶）。御子鳥海（御子鳥海）の神（御子鳥海の神）を生（生）たまふ。そも天地（天地）の剖判（剖判）始（始）より。
幾萬歳（幾萬歳）を歴（歴）し。いと浩遠（浩遠）なる世（世）の事（事）。曖昧（曖昧）なり。知（知）し。知らず。孫（孫）と
素盞鳴命（素盞鳴命）。此土（此土）に降臨（降臨）したまひ。國（國）の基（基）を築（築）き。此大國主（大國主）の神（大國主の神）の
るまに幾許（幾許）の歳（歳）を過（過）げん。後世（後世）より。その年歴（年歴）をいふ。のり。悉皆（悉皆）荒唐（荒唐）にて
據（據）る。こと。素盞鳴命（素盞鳴命）の女須世理姫（須世理姫）と嫡妻（嫡妻）と云ふ。人（人）といふ
ことも。人の世（人の世）より。これを聽（聽）たり。時代の大小（時代の大小）違（違）やう。いふ。これと。よ。て。神（神）の
隱身（隱身）といふ。幽冥（幽冥）。其身を隱（隱）したまひ。今も世（世）に在（在）せし。安（安）ふ。人の眼（人の眼）よ。え
や。りの。あ。わ。げ。幽顯（幽顯）分界（分界）と云ふ。神（神）と人（人）との隔（隔）か。は。く。定（定）て。後（後）の人（人）。此世（此世）と



大小異あることゆゑに、其れ年數の事及こゝらにこれ至ても、決して臆測を以
て論ずべきことあり。此大國主の神への豊葦原の中
つ國を經營造固んとて、出雲の國に島根郡の美保岬に到坐し、時、海の
上人の呼が如き聲の聽き、驚て之を見、さしひくとも都てこれぞといふ
物も、こゝろを、頃時あやと甚小き神の浪は、穂より蘿摩殺せ、船として
乘、鷓鴣の羽を衣として、服海湖に從り歸來するものなり。大國主神、其の
小され神を怪とわがり、之を掌の上置り、翫さしひくとも忽跳り其類を
齧けさる。その神の名を問たまふとも、答もえせざる。所從の神不
問すとも、皆知すと白すゆゑ、久延毘古を召り問たまひし。此の
此の産巢日神の御子少毘古那の神ありと白すゆゑ、神産巢日御祖命

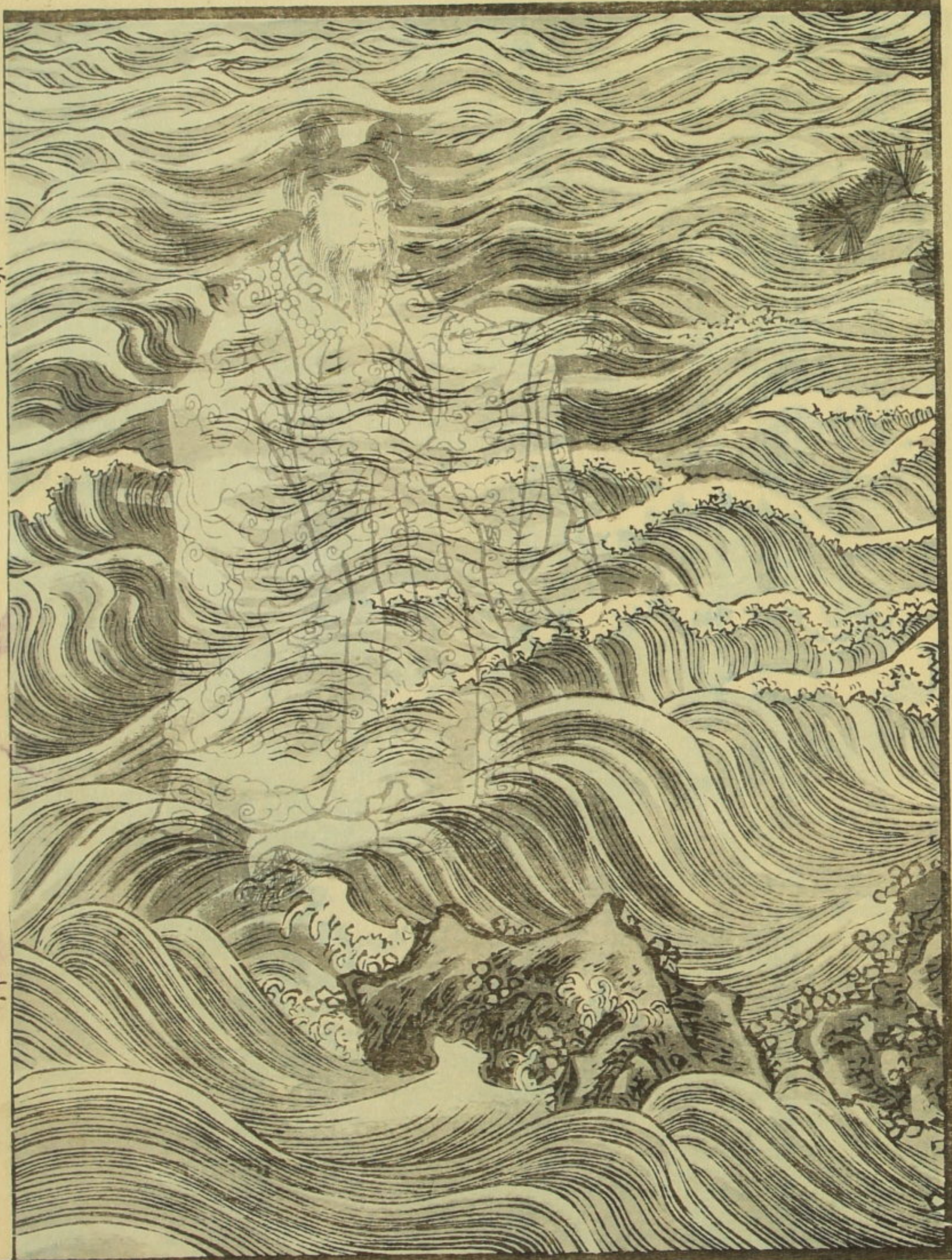
小白上り、六實不此の吾指問より、滴墮し、さる。よく愛養て、汝葦原の色許
男命と兄弟となり、其國を作堅とと答告さしひくとも、爾より此少毘
古那の神と相並り、天下を經營り、田疇と畫り、賦役と拘り、凡て百姓を
安輯せしめ、事と爲り、國土を作堅たまひ、青人草及牛馬雞犬などの爲り、
其病を療す方と定め、野鳥狐狸の怪を、蝗蝻の田畠を損ひ、稻由と
傷これ害と攘ん、其禁厭の法を定め、我豊葦原の瑞穂國を、
五穀豊饒り、穀味の美きこと、世界無比類り、膏沃の良地なれば、其土
地不生出、米穀菜蔬と喫ふ人の魚鳥の肉す。多く喫て、身體の攝養不
妨害あり。況て獸肉の神明の禁たまふとあり。唐土の例を、りて
あれと律せしめ、故に天武天皇の御世、天下を勅し、

牛馬犬猿雞の肉と食ことと制すまひ。孝謙天皇の御世あり。猪鹿の類い
すでども。嚴く禁たまひし。他邦に異る國土の秀靈ふれぬ。故に
神も六畜の病を療たまき方までと設たまひし。ことねまは此邦に生と
受たりの牛の肉とを猪鹿の肉とを比晨と司り時と告る雞の肉と
も。戒く喫べらる。おま國土の恩をかりし。神明の誠と奉る所以され
ばあり。さて大已貴命。いつとに少彦名の命。吾等が造ところ。比國善成
就なりと謂んるとの。まひし。少彦名の神。速その功績。自誇す。ま意
の發すまひし。と察すまひされ。今天下と經營たりとも。四方の隅まで遺
る。徳化の行けりたること。いあも。いつとに。善成なりといひ。こからんといひ。
其心と挫すまひ。その得意の念を抑たまひ。ほどく。伯耆の國は相見郡

の西北ある島に到るまひ。粟の莠實たす。その粟の莠。縁す。まこと。そが
馳く莖。彈れて。常世の國より渡すまひなり。常世の國といふ。何處かあれ
遠く海を渡り。往く國といふ。皇國の外。萬國皆常世の國なり。此少彦名の神と
御祖神産巢日の神は。指間より漏去たまひ。神おてその行方も。知まひし。
趣あり。遠く外國へ行たまひ。故なり。その海より。依來たまひ。外國より。渡來た
まひ。常世の國に渡り。まひ。外國へ。歸たまひ。なり。神功皇后の。鰺を。奉て
太子と。壽たまひ。御歌あり。酒の神。常世に。座。岩立す。少御神のと。詠たまひ。を。んれ
ば。後ま心も。外國に。鎮座す。まひ。あり。ま。粟莖。彈れて。常世の國に。渡り。まひ。
といふ。ま。少彦名の神の。身体の。彫小。ある。こと。知まひ。なり。かく。少彦名の神
の。常世の國に。去る。まひ。なり。は。より。大已貴命。大み。愁す。まひ。て。獨國中の

いまご成さるるところを經歷して遂に^{ついで}出雲の國に到る。此^{こゝ}葦原の中^の國
りくより荒芒^{あらい}なるのそやうに^い村ごとく私^{わたくし}の君長ありを^い頗^さ強^{つよ}暴^{あつ}相^{あひ}聽^き從^{したが}さ
るりのも多^{おほ}かりし^い吾^{われ}已^ま不^た摧^{くだ}伏^せと^い和^あ順^んさるりのもた^らな^しと^い僻^{へん}境^があ^らは^しる^い徳^{とく}化^け
の普^{あま}く^い届^{いた}ぎ^い所^{ところ}を^いた^らし^いも^いあ^らぬ^いと^い吾^{われ}一^{ひと}身^みの^いま^いた^らし^い先^まれ^いを^い輔^{たす}る^いりの^いか^きを^いい^い
せんやとの^いま^いひ^いつ^いあ^らは^しる^い躑^{しつ}躑^{しつ}と^いゆ^いと^い時^{とき}ふ^い忽^{たち}神^{かみ}光^{ひかり}の^い海^{うみ}を^い照^てして^い浪^{なみ}乃^な
上^あふ^い浮^う出^でる^いりの^いう^いて^い大^{おほ}巴^は貴^き命^{のみこと}より^い吾^{われ}在^あら^しむ^い汝^{なんぢ}の^いあ^らは^しる^い能^よ此^{こゝ}國^{くに}を^い平^{ひら}けん
や^い吾^{われ}在^あら^しむ^いこと^いか^きく^いも^い大^{おほ}造^{つく}功^{いさな}績^{なせ}を^い建^たてる^いもの^いを^い得^える^いる^いも^いあ^らは^しる^い
知^しる^いや^いと^いし^いひ^いたり^いふ^い大^{おほ}巴^は貴^き命^{のみこと}の^い駭^{おそ}疑^ぎと^い左^{ひだり}の^い汝^{なんぢ}は^い是^{これ}誰^{たれ}ぞ^いや^いと^い問^とた^らし^いひ^いされ^い
神^{かみ}人^{ひと}對^{たい}し^い吾^{われ}の^いま^いは^し汝^{なんぢ}が^い幸^{さい}魂^{たま}奇^き魂^{たま}あり^いとの^いや^い此^{こゝ}幸^{さい}魂^{たま}奇^き魂^{たま}とい^いふ^い識^し神^{かみ}の上^{うへ}に^い
具^{そな}へ^いる^い徳^{とく}用^{もち}とい^いふ^いところ^いに^い名^なあり^い此^{こゝ}幸^{さい}魂^{たま}奇^き魂^{たま}とい^いふ^い和^あ魂^{たま}とい^いふ^い幸^{さい}魂^{たま}とい^いふ^い

身^み不^ふ受^う得^{とく}たり^い識^し量^{りやう}の^い優^ま劣^{りやう}の^い徒^{ただ}不^ふ萬^{ばん}理^りを^い記^{おぼ}得^{とく}衆^{しゆ}務^むを^い總^{そう}宰^{さい}て^い一^{いつ}切^{せつ}の^い事^{こと}
物^{もの}不^ふ應^{おう}答^たる^い受^う得^{とく}たり^い幸^{さい}福^{ふく}を^い全^{ぜん}ふ^いする^いりの^いなり^い人^{ひと}と^いら^しむ^いと^い一^{いつ}身^みよ^いて^い
爲^なども^い神^{かみ}の^い氣^きを^い以^もて^い躰^{たい}と^いふ^い故^{ゆゑ}に^い祭^{まつり}祀^{まつ}奉^{ほう}る^い社^{やしろ}毎^{ごと}に^い御^ご魂^{たま}を^い裂^され^い
在^あら^しむ^いと^い以^もて^いや^い裂^され^い魂^{たま}の^い義^ぎあり^いや^い一^{いつ}切^{せつ}の^い事^{こと}業^{ごう}より^い萬^{ばん}事^じを^い識^し神^{かみ}の^い
中^{ちゆう}に^い藏^{かく}外^{がい}より^い來^きる^い物^{もの}不^ふ應^{おう}じ^いる^いを^いま^いく^いと^い判^{はん}別^{べつ}て^い僻^{へん}錯^{さく}こと^いあ^らは^しる^い不^ふ思^し
議^ぎの^い妙^{めう}用^{もち}ある^いと^い以^もて^いその^い靈^{れい}異^いと^いころ^いに^い徳^{とく}用^{もち}を^い奇^き魂^{たま}とい^いふ^いこの^い兩^{りやう}の^い
徳^{とく}用^{もち}を^い和^あ合^あ融^{じゆう}通^{つう}たる^いと^い和^あ竟^{けい}とい^いふ^い此^{こゝ}幸^{さい}魂^{たま}奇^き魂^{たま}の^い人^{ひと}を^いの^いと^いより^い鳥^{とり}
獸^{けつ}夾^あ魚^{ぎよ}一^{いつ}切^{せつ}の^い物^{もの}不^ふと^いれ^いく^いよ^い受^う具^ぐと^い生^{せい}を^い保^{たも}つ^い荒^{あらい}魂^{たま}とい^いふ^い荒^{あらい}
暴^{あつ}の^い意^いあれども^いと^いは^いあ^らは^しる^いあ^られ^いの^い詞^{ことば}は^い生^{せい}を^いあ^らは^しと^い訓^{とん}麤^ろと^いあ^らは^しと^い
訓^{とん}廢^{えい}を^いあ^らは^しと^い訓^{とん}義^ぎあり^い荒^{あらい}魂^{たま}とい^いふ^い生^{せい}を^い出^だした^いる^いま^いは^し魂^{たま}不^ふて^い壁^{かべ}言^{ごん}玉^{ぎよく}の^い



卷

十



大名
持命
奇魂
問答
の
處

いよふ琢磨を加ざるを荒玉といふが如く。その人の世は生出する身も
老廢ぬれば終に死ふゆるが如く。おは荒魂の中ふ幸魂奇魂和魂の
三を會藏て人畜草木の上より。そとくふ生死榮枯の同くらざるはつ
て。神と人との違はあれども。受得するところ此魂の根元を差別あり。
故に大己貴命の自己獨り。此国を作竟難しと憂さまひ。此幸
魂奇魂の志が潜藏し發現せず。たゞ荒魂はとみ。和魂の之さるれ
ば。造化の神は。別は和魂の象を現し。かくの教示さまひあり。是
を以て大己貴の命忽然了悟たまひ。唯然と。迺汝をこれ
吾幸魂奇魂なることを知り。汝今何の處ふの住んといはるると
のこまひけさる。よふ於て神人對て。吾の倭の國は三諸山に住んと

欲とあり。故に宮を彼處に管し就居し。おは三輪の御神あり。
その教の隨ふ齋祠たまひ。和魂満足て洪福を得。天下を普
く經營竟さまひあり。この幸魂奇魂の發現し諭たまふよとて。
大己貴の命も。向來の功績は。悉皆造化の自然なるところより成る。
自己の力あり。了悟さまひなり。此三輪の社今御殿の
あり。たゞ山に向て拜奉こと。如何なる故あり。崇神天皇の御世
に。おは裔孫大田々根子とて。三輪大神の祭祀を司り。高橋邑の人
活日と大神の掌酒となす。神酒を擧る。神宮に宴し。さまひとて。
天皇の御歌ふ。三輪の殿は且戸もと詠せさまひ。且戸を開はせ
のこまひ。長祿二年七月。三輪の大神社の室内鳴よとて。奉

幣(へ)より、社(やしろ)の戸(かど)の開(ひら)く、祈(いの)る、社(やしろ)の有(あ)り、
神(かみ)の意(い)め、御(み)祖(むら)の三輪(さんりん)明(あきら)神(かみ)は、たつひ諸(もろ)て、ついで總(おん)幕(まか)ふ、あひ女(メ)逢(あ)人(ひと)、あせ古(ふる)由(よし)を、
いひ偶(たま)ふ、いふあまを、こゝろ造(つく)り、かきわを、くさ群(ぐん)鴉(あ)来(きた)る、つひ喝(か)破(ぱ)し、こゝろなごもひを、やしろ社(やしろ)の、あせ明(あきら)る
祭(まつ)奉(ほう)ふ、あせ然(あ)る、いひり、あせ然(あ)る、いひり、あせ凡(おん)慮(れい)の、あせ側(がは)を、あせ此(こ)を、あせ和(わ)魂(たま)を、
あせ明(あきら)る、

日本國開闢由來記卷一終



